

4) 松村春繁初代断酒会・会長との出会い

★ 松村春繁 享年65歳 1905(明治38)年4月1日～1970(昭和45)年1月30日

後免町(現・南国市)の診療所・川田内科より紹介されて来院、下司孝麿が勤務する町田病院精神科外来を受診。1950年～1956年の6年間、高知市内帯屋町二丁目の町田病院内科に5回の入院を繰り返します。

『兄のアルコール依存症死』にも『今際の母の手が振り払った拒絶』にも『妻文子に常子の誕生』にも断酒できず、『主治医のなんともいえない顔』にこれは見捨てられては大変だと、ようやく断酒につながります。医師が医療の敗北を認め、そのとき松村に始めて断酒の意味が芽生えました。

○治療歴 精神病院入院歴はなし(町田には精神科ベッドはなく、なだいなだ等の精神病院入院記述は誤り。下司孝麿はアルコール依存症患者を系列の精神病院「精華園」には回さなかった) エメチン療法は失敗します。

○人柄 ベッドで聞いている広沢寅造 くどき文句は義理人情 ヘビースモーカー の印象があります。このタバコで人生を終えました。

○労働運動 戦前の無産運動では検挙歴もあるがこのとき早くも酒害で開催届けを忘れ演説会が弾圧を受けます。

○民同人脈 江田三郎 西尾末広 氏原一郎 佐竹晴記 片山哲ら、断酒会時に人脈を生かす。

○断酒運動 「2年ほど経つと自分で前を切り出しました」 病院がつけた秘書の川村効子嬢の談
「余人はいざ知らず、貴君は治る」 聞いたインテリ的小林哲夫さんは嬉しくなりました
「早く医師になって」 私に この時期、酒害に取り組む医師は皆無、今また医師不足な環境

☆ 下司孝麿 享年96歳 松村の9歳年下 1914(大正3)年8月17日～2011(平成23)年6月2日

1950年 エメチン療法を学会発表 この頃松村氏が受診に現れます。

1956年 松村春繁 断酒に踏み切ります

1958年 1月14日に下司が松村に断酒会創設・誘いの手紙を出します。

1958年 11月9日松村氏らの高知県断酒新生会設立を応援します。

禁酒同盟小塩完次講演会での松村春繁と小原寿雄、二人の出会いは、AAにおけるビル(証券マン)とボブ(外科医)の出会いを髣髴とさせます。当時は自助運動そのものが珍しい時代でそれまでは劣等者として「アル中は『断種』すべし」とされていました。

1960年 やっと断酒運動の芽が出ます

高度経済成長の始まり 鉱工業生産性指数と酒生産量の右肩上がり同一カーブを描きます。戦後猛威を振った結核の終息と1960年代後半 医療被害・薬害・公害運動の起きた狭間に断酒会は高度成長を遂げます

5) 断酒会の誕生

断酒友の会 1953年、9月12日、日本で初、禁酒同盟傘下に発祥。

高知県断酒新生会 1958年11月25日、下司病院応接室

東京断酒新生会 1958年12月5日、池袋信用組合会議室(断酒友の会より分離)

東京断酒新生会が禁酒同盟から独立 1962年4月1日

東京断酒新生会と高知の二つの会で全日本断酒連盟 結成 1963年11月10日 土佐電鉄文化ホール
その相方に禁酒同盟の援助がありました。「断酒会」という言葉や規範の原型が禁酒運動から継承しています。

6) 断酒会支援者

下司孝麿の高知県での取り組みは同時期取り組んだアメリカ生まれのライオンズクラブからは奉仕精神を学び、断酒会運営へのヒントにしました。

一方で、酒を排撃するものではないと酒国土佐で対社会的に断酒会とバランスを保つために知事などと酒を楽しむ社交クラブ『羊子会』結成します。

病気として酒害を捉え、治療は次第に →薬物療法 →集団精神療法 →断酒会へと進みますが、断酒会への支援が先行して、院内治療は遅れます。

全国行脚を続ける組織運動家の松村春繁氏を援助し組織化を支援することに精力を使ったといえます。

こうして、時と人を得た断酒会は高度成長の日本社会に適応してゆきました。

高知で断酒会を支援した人としては沢村栄一高知大教授と秦泉寺正一高知大教授が上げられます。

沢村栄一 教授は、フルブライト資金で米留学。AAを視察、翻訳しました。田舎の高知から独自調査をして断酒会を支えていったわけです。

秦泉寺正一 高知大教授は、旗・バッチ・歌などにオリジナリティを發揮 集団療法の効果を知っていました。下司孝麿と同時に断酒会に集団精神療法を構想したといえます。東京オリンピックの準備に駆り出されて1962年頃には断酒会支援を終えました。

中沢寅吉 中沢薬業社長は、戦前から高知の禁酒運動家として私財を投じて禁酒運動を続けていました。2年間、毎回断酒例会に連続参加して下さっていました。

7) 断酒会のいいところ

うわべを飾らずに心情を語れるところ。

薄れ行く人間性のよみがえるところ。

断酒会は株のように誰かが得するから誰かが泣くことがない、何人でも立ち直る人数に制限がない。

お酒をやめるには仲間から酒害体験を聞けるところ。

励ましあい、助け合い、慰めあいの気持ちが触れ合う場所。(下司孝麿)

日本経済に貢献、経済貢献は1兆円と言ったことがあります。(下司孝麿)

何時でも何処でも誰でも出来る会 (下司孝麿)

断酒の仲間を持って、ないのが自殺です。

仲間を大切にする断酒会には除名がない。(断酒鉄言・下司孝麿)

断酒会には病院への保険証も、税金の支払いも要りません。

断酒会こそ近江商人の家訓「売り手良し、買い手良し、世間良し」で繁盛した「三方良し」そのもので、「酒害者良し、家族良し、世間良し」の実践者。(下司孝之)

断酒会は我が国最大の歴史のある自助共助の病者団体です。

公益法人になって相互援助団体になったのでは。

徒党を組める幸せもあります。仲間がいていいですね。

精神病院の風通しを良くしました。

会として社会奉仕に動けます。

8) 断酒会は酒害予防に社会参加できる

酒害を生活習慣病として捉えると、アルコール依存症も予防が大切となります。予防には一次、二次、三次の三

段階があります。

アルコール依存症の一次予防では病気の発生そのものを防ぎます。断酒運動は体験発表を持って地域や学校・職場の勉強会に参加が出来ます。

二次予防は病気の早期発見・早期治療のことで発見を手伝え、早期治療につなぐことが出来ます。

三次予防は再発防止で断酒会通いはリハビリのようなものでしょうか。

このように断酒運動は酒害を1次予防から3次予防までカバー出来る存在です。健康な習慣があるほど病気にかかりにくいことは酒害でも自明の理です。個人でも、会としてでも断酒会は予防活動に参加できる位置にいます。

9) 三つの否認を解除して

私是一个目の『依存症の否認—私には酒の問題は無い—』の次、二つ目の『依存症以外の問題の否認—私には酒以外の問題は無い—』を家族と社会に分けてみました。

- 1、依存症の否認
- 2、家族を省みない否認
- 3、社会を省みない否認

1、は医療サイドでも気付きを促します。

2、は酒を飲んでいただけの方がまだまし、ちっとも変わってないと言われる・ドライランカーからの脱却

3、1、2を克服して『家族ぐるみ』で取り組む課題です。

3、においてやっと世直しと余直りを補い合う関係を持つことが出来るようになると思います。

下司孝磨は晩年「断酒して5年も経てば奉仕活動に踏み出すべきである」と申し立てましたが、このような時期の到来でしょう。

酒害は習慣性や親などからの模倣性が強く、否認の克服を奉仕で乗り越える必要性を強く感じます。

奉仕と言うと嫌がる向きもありますがボランティアのことで、自らの問題を解決しながら社会改良や変革などの社会活動に参加していくことが望ましいと考えます。

その人の志向に合ったあらゆる分野の社会運動への参加が自らの断酒を確かなものにもします。

『世直し』を志向するならば世直しに持続するエネルギーを送り出していくための1～3の否認を解除してゆく時間も思考過程もいるということです。

「余直り」は『世直し』の高揚感の中でスリップするのを押しとどめます。

社会改良なり、変革なりを思考するにしても酒害者は「余直り」の自己検証を続けていかなければいけない存在のように伺われます。

だからアルコール依存症の場合は回復と言うよりも『立ち直り』だとわたしは思います。